

高校運動部活動における

生徒のオーバーコミットメントと参加動機に対する自己決定性

—性別・学年・競技水準・競技種目からの検討—

Student Overcommitment and Motivation in High School Athletic Clubs

: Analysis in terms of gender, grade, competition level and event

松井幸太

Kota Matsui

要 約

本研究は、高校運動部活動における生徒のオーバーコミットメントと参加動機に対する自己決定性について生徒の属性ごとに比較することを目的とした。運動部所属の高校生 978 名を対象に質問紙調査を行い、生徒の属性ごとの特徴を次のように比較することができた。性差に関しては、女子は男子よりも、オーバーコミットメントと自律的動機が高かった。特に、都県大会水準の部活動にその傾向がみられた。学年による比較では、1 年生のほうが 2, 3 年生よりも自律的動機が高かった。部内における生徒個人の競技水準に関しては、レギュラーと準レギュラーの生徒のほうが、非レギュラーの生徒よりも他律的動機が高かった。部全体としての競技水準に関しては、男子において、全国大会水準の部活動の生徒のほうが、地区大会および都県大会水準の部活動の生徒よりも、オーバーコミットメントと自律的動機が高かった。最後に、競技種目に関しては、集団種目の生徒のほうが個人種目の生徒よりもオーバーコミットメントが高かった。

Key Words : 高校運動部活動, オーバーコミットメント, 自律的動機, 他律的動機, 性, 学年, 競技水準, 競技種目

1. 問題と目的

学校教育の一環として展開される運動部活動は、教育的な視点と競技スポーツとしての視点との両方が含まれる活動である。そのため、教育的な効果が期待される一方で、競技的成果をあげることも期待されており、この二つの視点からの期待が高まっていることが知られている（久保, 1998; 文部省, 1997）。

運動部活動への教育的期待や競技的期待が高まるとともに、生徒がより一層、運動部活動へ専心する様子が見受けられる。生徒は技術の習得や競技力の向上を目指し、多くの時間と労力をかけて練習に取り組む中で、日常生活における部活動の比重が大きくなることも少なくない。運動部活動の在り方に関する調査研究報告（文部省, 1997）によれば、運動部活動への参加率は高く（中学生 73.9%, 高校 49.0%）、そのうち週 6, 7 日活動している生徒の割合は、中学生では 72.4%, 高校生では 77.8%であり、運動部活動参加者の多くがほぼ毎日活動している現状が示されている。教育の中心に位置づく正課活動である授業が週 5 日行われているのに対して、運動部活動が週 6, 7 日行われているという現状は特筆すべきである。運動部活動に積極的であるということは、一

見望ましい行動のように思われるが、過度に専心しすぎることによって、身体的心理的な負担の増大、家庭生活への影響、勉強や趣味の時間との両立などさまざまな問題を抱えることになる。同調査研究報告（文部省，1997）において、運動部活動に関する悩みについて生徒に最大3つまで回答を求めたところ、「疲れがたまる」（中学生 28.9%，高校生 32.8%）、「遊んだり勉強する時間がない」（中学生 25.4%，高校生 32.1%）、「休日が少ない」（中学生 27.2%，高校生 28.7%）が中学生、高校生ともに上位3つの回答であった。このように、運動部活動への教育的競技的期待の高まりにより、運動部活動へかける時間と労力の増大が、生徒にとって心身ともに過剰な負担となっている様子がうかがえる。

こうした運動部活動における過剰な取り組みは、時としてオーバーコミットメントと呼ばれることがある。オーバーコミットメント（overcommitment）とは、努力—報酬不均衡モデル^{注1）}（Siegrist, 1996）における概念の一つであり、必ずしも良好とはいえない状況であっても、仕事に過度に傾注する個人の態度や行動パターンを指し、ストレスフルで危険な行動パターンとして位置づけられている（Joksimovic et al., 1999）。スポーツ場面においては、Schmidt and Stein（1991）が、報酬が少なくコストが大きいいにもかかわらず、将来の利益を見込んで投資し続けるコミットメントのあり方をバーンアウトと呼んでいるが、報酬とコストの均衡がとれてない状況であっても傾倒し続ける点において、オーバーコミットメントとの共通点がうかがえる。永島（2002）は、過度の練習を繰り返すことによって、心身の疲労と回復のバランスが崩れ、通常の短期間の休息では回復しない病的な慢性的疲労状態に陥り、さまざまな身体症状や精神症状を呈すると述べている。したがって、運動部活動における生徒の過剰な取り組みに対してもオーバーコミットメントの視点から検証していく必要があると思われる。

また、運動部活動へ取り組む生徒の参加動機に着目すると、生徒自らの興味関心により積極的に取り組んでいる一方で、時に、指導者や親から競技成績を期待されたり、仲間関係における居場所や自己のあり方を模索したりといった何らかの必要性に迫られて活動している側面もあると思われる。高田ほか（1987）は、運動部活動において不適応状態にありながらも休むことができない、あるいは辞めることができない中学生の事例を挙げ、「殆どの事例が専制的な集団雰囲気の中での厳しい上下関係に苦しみ、管理主義的な部活動運営の中で自己決定もできず、言いたい事も言えず、自分を押し殺していた」と述べている。また、Weiss（1995）は、親の期待を裏切ることへの罪悪感や周囲からのネガティブな評価を気にして競技からの離脱を自ら言い出せず、結果的に故意に怪我を負うことによって競技から離脱した少女の事例を報告している。周囲の期待に応えることをのみ優先し、自らの願望や欲求を抑制して活動に打ち込むという過剰適応状態は、結果として心身症（遠山, 1977）やバーンアウト（中込・岸, 1991; Schmidt & Stein, 1991）といった不適応を引き起こすことになりかねない。

このように、運動部活動への参加や継続にはさまざまな理由が混在しており、純粹に本人の願望や欲求だけではなく、周囲との人間関係を意識したり、自分の将来や進路への影響を考えたりしながら、生徒が運動部活動に取り組んでいる様子がうかがえる。そこで運動部活動における参

加動機の多様性を考慮し、運動部活動に対して生徒自らの欲求により活動している側面と、周囲の人の考えや意見を反映させて活動している側面のそれぞれの参加動機について着目していく必要がある。

このような視点から、先行研究(松井, 2015)では、自己決定理論(Deci, 1975, 1980; Deci & Ryan, 1985)を援用し、参加動機に対する自己決定性が高い動機から自己決定性の低い動機までを一連のスペクトラムとして捉えることによって、自己の欲求に基づき自律的に活動に取り組んでいる面と、他者からの期待や願望が優先され他律的に取り組んでいる面のそれぞれの参加動機から生徒のオーバーコミットメントのあり方について検討している。特に、生徒と指導者の関係に着目し、4パターンの選手と指導者の関係^{注2)}ごとに、その特徴を検証しており、その結果、両高型では、自律的動機づけも他律的動機づけもともに高く、その取り組みはオーバーコミットメントの可能性が高いことが示唆された。反対に、統制型と両低型では、自律的動機づけも他律的動機づけも低く、オーバーコミットメントの可能性は少なかった。最後に、受容型では、両高型に次いで自律的動機づけが高く、他律的動機づけは低く、オーバーコミットメントは中庸であった。

このように先行研究により、生徒のオーバーコミットメントと参加動機の自己決定性について検討されている。しかし、これらの各要因が生徒の属性によって異なった特徴を示すことも考えられる。つまり、生徒の性別や学年、競技水準や競技種目といった生徒一人ひとりのおかれた状況によって、異なった特徴を示す可能性が考えられる。そこで本研究では、生徒のオーバーコミットメントと参加動機の自己決定性について、生徒の属性ごとに比較することによって探索的な検討を行うことを目的とする。

2. 方法

2.1 対象者と調査時期

1都5県の高等学校運動部所属の男女978名(高校1年生～3年生, 男子813名, 女子164名, 性別無記名1名)を対象に2008年6月下旬～9月上旬に質問紙調査を実施した。競技種目は球技を中心とした20種目^{注3)}であり、競技水準は地区大会から全国大会まで幅広い。本調査では、生徒が週5日以上活動を行っており、生徒の活動日の半分以上は指導者が部活動指導にあたっている部活動を対象とした。

2.2 手続き

調査依頼については、まず部活動の顧問に調査依頼書および質問紙を渡すとともに趣旨を説明した後、生徒への質問紙調査実施の許可を学校側に得た。調査実施にあたっては、高等学校に本研究者が赴き、運動部ごとに練習や試合の前後を利用し、集団調査法で実施した。調査の際、筆者が生徒に対して匿名性や守秘義務の遵守について説明を行い、承諾した生徒のみが調査に参加した。質問紙のほとんどがその場で筆者により回収され、後日回収の場合には、質問紙は封入された状態で回収された。

2.3 質問項目

生徒の運動部活動へのオーバーコミットメントを尋ねる 6 項目と、運動部活動への参加動機を尋ねる 13 項目に対して、それぞれ 5 件法（5 点：とてもあてはまる，4 点：ややあてはまる，3 点：どちらでもない，2 点：あまりあてはまらない，1 点：全くあてはまらない）で生徒に回答を求めた。なお、各尺度項目に関しては、臨床心理学を専攻する大学院生 4 名と大学教員 1 名で内容的妥当性について検討した。

また、本調査用紙のフェイスシートにおいて、性別・学年・競技種目・競技暦・現在の指導者の下での競技暦・チーム内での役割・競技成績・1 週間の生徒の活動日数・1 週間の指導者の指導日数について記入する欄を設けた。

(1) 運動部活動へのオーバーコミットメント

運動部活動へのオーバーコミットメントを尋ねる項目（松井，2015）を使用し、計 6 項目に対して生徒に回答を求めた。運動部活動へのオーバーコミットメントを尋ねる項目は、部活動希求性（「3. 生活の他の時間を削ってでも部活の時間を作りたい」、「6. 生活の中心は部活動である」）、部活動以外への興味関心の欠如（「1. 部活動をやめたら、学校へ行く意味を感じられない」、「2. 部活以外のことには興味がわからない」）、競技性の追求（「4. 技術が向上するならば、どんなに厳しい指導にもついていきたい」、「5. 多少身体に無理をしてでも、練習に取り組みたい」）の 3 つの観点から作成されたものであるが、1 因子構造であることが確認されている。よって、6 項目の平均値を運動部活動へのオーバーコミットメント得点とした。

(2) 運動部活動への参加動機の自己決定性

生徒の運動部活動に対する動機づけを尋ねる項目（松井，2015）を使用し、計 11 項目に対して生徒に回答を求めた。これらの項目は、The Sport Motivation Scale（SMS: Pelletier et al., 1995）もとに作成されている。SMS では自己決定理論（Deci, 1975, 1980; Deci & Ryan, 1985）に基づき、参加動機に対する自己決定の程度により 5 つの下位尺度から構成されている。つまり、最も自己決定されていない参加動機である「無動機づけ」から、順に「外的調整^{注 4)}」、「取り入乐的調整^{注 5)}」、「同一化的調整^{注 6)}」と自己決定の程度は強くなり、「内発的動機づけ」が最も自己決定された参加動機である。しかしながら、SMS をもとに作成された生徒の運動部活動に対する動機づけを尋ねる項目（松井 2015）では、以下のような 2 因子構造が確認されている。

第 1 因子は、自己決定された自律性の高い動機を表す「自律的動機づけ」であり、内発的動機づけに該当する項目（例えば、「1. 新しい技術や戦術を知るのが楽しいからである」）や同一化的調整に該当する項目（例えば、「6. 自分自身の新たな側面を伸ばす最も良い方法だと思うからである」）を中心とした 7 項目から構成されている。第 2 因子は、比較的自己決定されていない自律性の低い動機を表す「他律的動機づけ」であり、外的調整に該当する項目（例えば、「4. 部活動をすることで周囲から注目されるからである」、「8. 良い体形が大切であると周囲の人々は思っているからである」）や取り入乐的調整に該当する項目（例えば、「部活動をすると、たくましい身

体（もしくはスマート）になれるからである」）を中心とした4項目から構成されている。

したがって、本研究では運動部活動への参加動機の自己決定性を尋ねる11項目のうち、「自律的動機づけ」に尋ねる7項目の平均値を自律的動機得点とし、「他律的動機づけ」を尋ねる4項目の平均値を他律的動機得点とした。

3. 結果

3.1 学年と性による影響

各尺度得点に関して、学年ごとに男女それぞれの平均値と標準偏差を Table1 および Figure1 に示した。学年と性による影響を検討するため、学年と性を独立変数とし、各尺度得点を従属変数とした2要因分散分析（被験者間計画）を行った。

結果より、いずれの尺度得点においても交互作用が確認されなかったため、それぞれ主効果の確認を行った。オーバーコミットメントにおいては、性による有意な主効果が確認され ($F(1, 969) = 6.84, p < .01$)、女子のほうが男子よりも有意に高かった。また、自律的動機においては、学年による有意な主効果が確認され ($F(2, 969) = 4.78, p < .01$)、多重比較（Bonferroni 法）の結果、1年生のほうが2年生および3年生よりも有意に高かった ($p < .01, .05$)。なお、他律的動機においては、有意な主効果は確認されなかった。

Table1 学年と性による各尺度得点（標準偏差）および分散分析の結果

	性	男子			女子			分散分析(F 値)		
		1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生	性	学年	交互作用
下位尺度	学年	[n]	[347]	[332]	[132]	[80]	[66]	[18]		
オーバーコミットメント	M	3.17	3.04	3.04	3.40	3.30	3.20	6.84 **	n.s.	n.s.
	(SD)	(0.79)	(0.89)	(0.84)	(0.74)	(0.81)	(0.76)	男子<女子		
自律的動機	M	3.94	3.77	3.79	4.09	4.00	3.71	n.s.	4.78 **	n.s.
	(SD)	(0.70)	(0.72)	(0.65)	(0.57)	(0.59)	(0.58)	1年生>2,3年生		
他律的動機	M	2.99	2.97	3.10	2.97	2.91	2.75	n.s.	n.s.	n.s.
	(SD)	(0.74)	(0.76)	(0.84)	(0.70)	(0.68)	(0.67)			

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

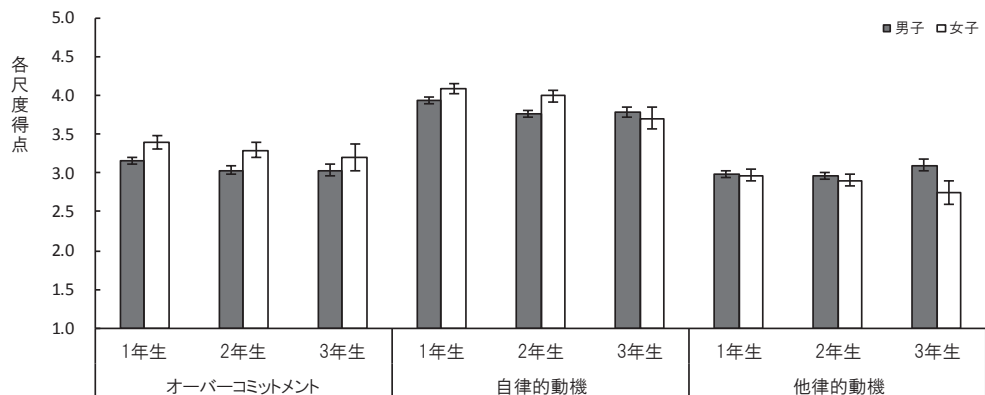


Figure1 学年と性による各尺度得点の比較

3.2 部内における生徒個人の競技水準と性による影響

部内における生徒個人の競技水準ごとの各尺度得点を男女別に Table2 および Figure2 に示した。部内における生徒個人の競技水準については、レギュラー・準レギュラー・非レギュラーの3つに分類した。部内における生徒個人の競技水準と性による影響を検討するため、競技水準（部内）と性を独立変数とし、各尺度得点を従属変数とした2要因分散分析（被験者間計画）を行った。

結果より、いずれの尺度においても交互作用は確認されず、それぞれ主効果の確認を行った。オーバーコミットメントと自律的動機においては、性による有意な主効果が確認され ($F(1, 906) = 11.80, 6.76, p < .001, .01$)、いずれも女子のほうが男子よりも有意に高かった。また、他律的動機においては、競技水準（部内）による有意な主効果が確認された ($F(2, 906) = 3.29, p < .05$)。競技水準（部内）に対する多重比較（Bonferroni 法）の結果、レギュラーおよび準レギュラーの生徒のほうが非レギュラーよりも有意に高かった ($p < .01, .01$)。

Table2 部内における生徒個人の競技水準と性による各尺度得点（標準偏差）および分散分析の結果

	性	男子			女子			分散分析(F 値)		
		1.レギュ	2.準	3.非	1.レギュ	2.準	3.非	性	競技水準 (部内)	交互作用
下位尺度	[n]	[263]	[184]	[325]	[69]	[28]	[43]			
オーバーコミットメント	M	3.23	3.03	3.00	3.42	3.35	3.32	11.80 ***	n.s.	n.s.
	(SD)	(0.84)	(0.84)	(0.80)	(0.83)	(0.78)	(0.71)	男子<女子		
自律的動機	M	3.97	3.87	3.73	4.02	4.04	4.01	6.76 **	n.s.	n.s.
	(SD)	(0.65)	(0.71)	(0.70)	(0.66)	(0.54)	(0.49)	男子<女子		
他律的動機	M	3.10	3.06	2.88	2.90	3.13	2.84	n.s.	3.29 *	n.s.
	(SD)	(0.83)	(0.72)	(0.71)	(0.75)	(0.62)	(0.54)	1.レギュ, 2.準>3.非		

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

1= レギュラー, 2= 準レギュラー, 3= 非レギュラー

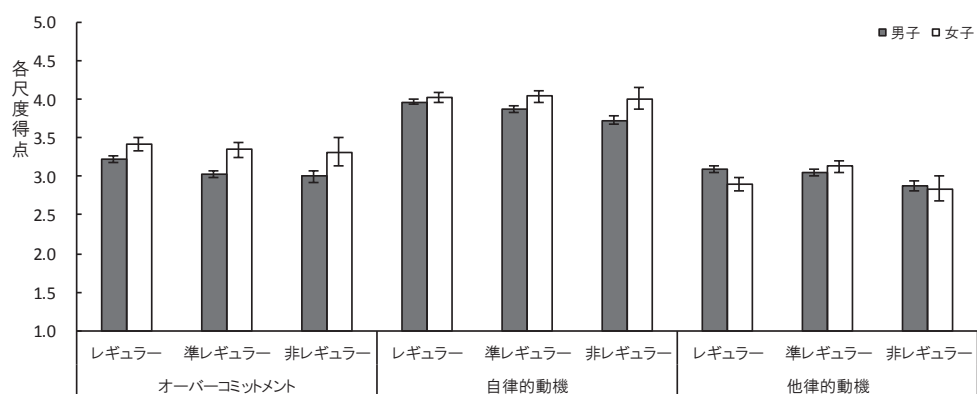


Figure2 部内における生徒個人の競技水準と性による各尺度得点の比較

3.3 部全体としての競技水準と性による影響

部全体としての競技水準ごとの各尺度得点を男女別に Table3 および Figure3 に示した。部全体としての競技水準については、大会への出場経験をもとに地区大会水準・都県大会水準・全国大会水準の3つに分類した。部全体としての競技水準と性による影響を検討するため、競技水準(部間)と性を独立変数とし、各尺度得点を従属変数とした2要因分散分析(被験者間計画)を行った。

結果より、オーバーコミットメントと自律的動機において交互作用が確認された($F(2, 915) = 3.91, 3.01, p < .05, .05$)。そこで単純主効果の検定を行ったところ、オーバーコミットメントと自律的動機ともに、都県大会の場合に、女子のほうより男子の方が有意に高かった($F(1, 915) = 21.29, 12.58, p < .001, .001$)。また男子の場合、オーバーコミットメントと自律的動機は全国大会水準の部活動の生徒のほうより地区大会および都県大会水準の部活動の生徒の方が有意に高かった($F(2, 915) = 17.64, 9.17, p < .001, .001$)。他律的動機においては、交互作用は確認されなかったため、主効果の確認を行ったが、有意な結果は得られなかった。

Table3 部全体としての競技水準と性による各尺度得点(標準偏差)および分散分析の結果

性	競技水準(部間)	男子			女子			分散分析(F 値)		
		1.地区	2.都県	3.全国	1.地区	2.都県	3.全国	性	競技水準(部間)	交互作用
下位尺度	[n]	[264]	[413]	[95]	[48]	[96]	[5]			
オーバーコミットメント	M	3.08	3.02	3.57	3.23	3.45	3.07	—	—	3.91 *
	(SD)	(0.83)	(0.81)	(0.84)	(0.87)	(0.73)	(0.55)	都県:男子<女子 / 男子:地区,都県<全国		
自律的動機	M	3.84	3.80	4.13	3.96	4.07	3.66	—	—	3.01 *
	(SD)	(0.72)	(0.69)	(0.58)	(0.63)	(0.54)	(0.94)	都県:男子<女子 / 男子:地区,都県<全国		
他律的動機	M	2.92	3.03	3.13	2.97	2.95	2.65	n.s.	n.s.	n.s.
	(SD)	(0.74)	(0.75)	(0.87)	(0.65)	(0.70)	(1.11)			

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

1= 地区大会水準, 2= 都県大会水準, 3= 全国大会水準

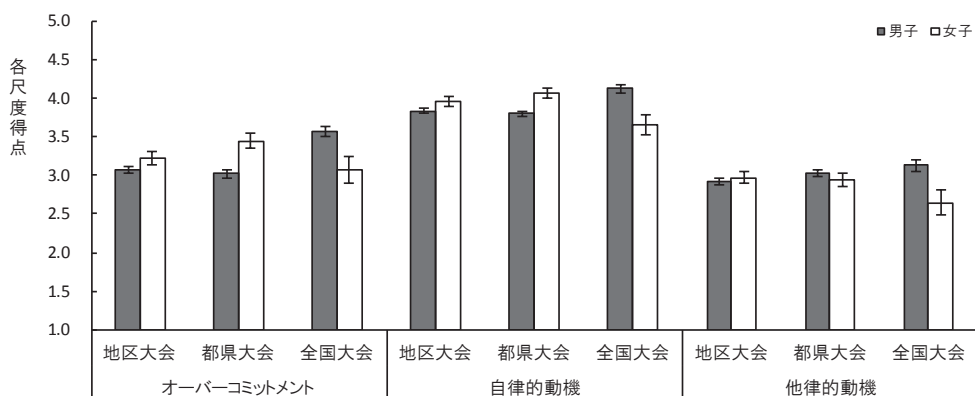


Figure3 部全体としての競技水準と性による各尺度得点の比較

3.4 競技種目と性による影響

競技種目ごとの各尺度得点を男女別に Table4 および Figure4 に示した。競技種目については、集団種目と個人種目の2つに分類した^{注7)}。競技種目と性による影響を検討するため、競技種目と性を独立変数とし、各尺度得点を従属変数とした2要因分散分析（被験者間計画）を行った。

結果より、いずれの尺度においても交互作用は確認されず、それぞれ主効果の確認を行った。オーバーコミットメントにおいては、競技種目と性による有意な主効果が確認された ($F(1, 973) = 4.46, 12.98, p < .05, .001$)。競技種目については、個人競技よりも集団競技のほうが有意に高く、性については女子のほうが男子よりも有意に高かった。自律的動機においては性による有意な主効果が確認され ($F(1, 973) = 7.55, p < .01$)、女子のほうが男子よりも有意に高かった。他律的動機については、有意な主効果は確認されなかった。

Table4 競技種目と性による各尺度得点（標準偏差）および分散分析の結果

下位尺度	性 競技種目 [n]	男子		女子		分散分析(F 値)		
		集団種目 [589]	個人種目 [224]	集団種目 [94]	個人種目 [70]	性	競技種目	交互作用
オーバーコミットメント	M (SD)	3.13 (0.82)	3.00 (0.88)	3.42 (0.76)	3.24 (0.77)	12.98 *** 男子<女子	4.46 * 集団種目>個人種目	n.s.
自律的動機	M (SD)	3.85 (0.68)	3.84 (0.76)	4.02 (0.56)	4.01 (0.62)	7.55 ** 男子<女子	n.s.	n.s.
他律的動機	M (SD)	3.01 (0.76)	2.97 (0.78)	2.93 (0.67)	2.91 (0.72)	n.s.	n.s.	n.s.

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

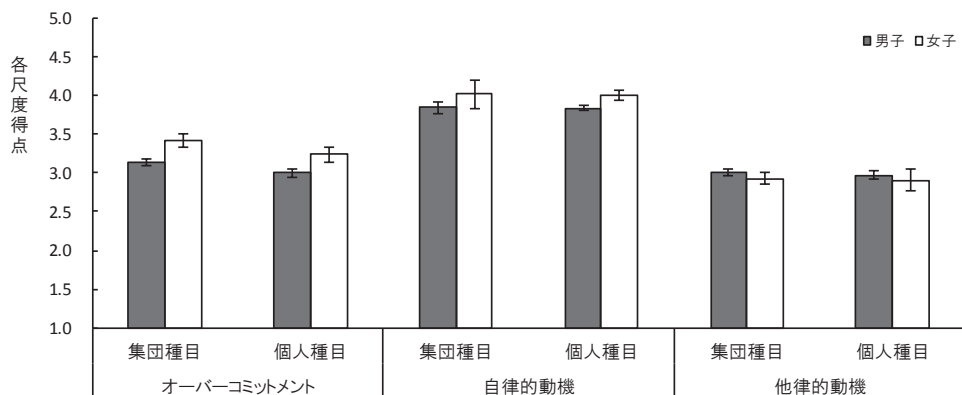


Figure4 競技種目と性による各尺度得点の比較

4. 考察

4.1 性による影響

まず、性による影響に関しては、オーバーコミットメントにおいて、概ね女子のほうが男子よりも高い傾向がみられた。特に、都県大会水準の部活動の生徒にこの傾向がみられた。自律的動機づけにおいても、一部の条件間を除き概ね女子のほうが男子よりも高い傾向がみられた。特に、都県大会水準の部活動の生徒にこの傾向がみられた。

したがって、全体として共通した男女の特性についてまとめると、オーバーコミットメントと自律的動機について、概ね女子のほうが男子よりも高かった。そのため、女子は男子よりもオーバーメントの傾向であるが、その動機は自律的な理由であることから、自律的に部活動に参加していると特徴づけることができる。

4.2 学年による影響

次に、学年による影響に関しては、自律的動機づけにおいて、1年生が2年生および3年生よりも高いことが示された。自律的な参加動機をより成熟した動機づけの在り方であると捉えようとすると、学年を経るにつれて自律的動機が増加することが予想されたが、本結果では1年生のほうが自律的動機は高かった。このことは、入部して1年目である1年生のほうが純粋にスポーツに対する興味が高く、より自律的な動機で部活動に参加しているが、学年が上がるにつれ、単にスポーツをすることに対する関心や魅力ではなく、周囲との人々の関係や自分の将来を踏まえ、部活動に取り組むことが増えてくるからではないかと推測される。

4.3 競技水準（部内）による影響

部内における生徒個人の競技水準による影響に関しては、他律的動機において、レギュラーおよび準レギュラーの生徒のほうが、非レギュラーの生徒よりも高かった。他律的動機の項目には、「部活動をすることで、周囲から注目されるからである」や「自分がどれだけうまいかを他人に見せたいからである」などが含まれており、他者からの視線を意識した参加動機であるといえる。そして、非レギュラーの生徒は大会などの公式試合への出場する機会を得られないのに対し、レギュラーや準レギュラーの生徒は公式試合に出場する機会が多いという違いがある。これらのことを踏まえると、レギュラーや準レギュラーの生徒が公式試合に出場し、他者からの注目を浴びてプレーする経験を得ることが、他者からの視線を意識した他律的な動機の高さに関連していると考えられる。

一方、自律的動機においては、部内での生徒個人の競技水準による違いはみられなかった。このことから、レギュラーや準レギュラーの生徒のほうが、非レギュラーの生徒よりも他律的動機は高いが、自律的動機については相違ないことが示されたといえる。

4.4 競技水準（部間）による影響

部全体としての競技水準による影響に関しては、男子の場合に、オーバーコミットメントと自律的動機において、全国大会水準の部活動の生徒のほうが、地区大会および都県大会水準の部活動の生徒よりも高かった。したがって、男子の場合は、全国大会水準の部活動の生徒の取り組みは、部活動以外の活動や時間を犠牲にしてまで取り組みたいというオーバーコミットメントの可能性が高いといえる。そして、その参加動機に関しては、自律的な動機が高く、彼らはスポーツに対する楽しさや満足感といった内発的な動機づけや、「自分自身の新たな側面を伸ばす最も良い方法だからである」、「私の人生に役に立つ多くのことを学ぶ良い方法だからである」といった同一化的調整により部活動に参加していることが示唆された。

4.5 種目による影響

競技種目による影響に関しては、オーバーコミットメントにおいて集団種目の部活動の生徒のほうが、個人種目の部活動の生徒よりも高かった。集団種目の部活動では、競技の特性としてチームワークが求められ、チームメイトとの関係を意識しやすい部活動環境であると考えられる。そうした社会的な環境の中で自分自身の居場所を探したり、チームにおける役割や責任を全うしたりすることによって、部活動が生徒にとって自己の同一性を投影しやすい場所となりうると考えられる。このような集団種目のもつ対人関係の特徴が、生徒のオーバーコミットメントと少なからず関連しているのではないかと考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究は、高校運動部活動における生徒のオーバーコミットメントと参加動機の自己決定性について検討を行った先行研究（松井，2015）に対して、生徒の属性（性・学年・競技水準・競技種目）ごとの特徴について検証を加えたものである。結果より、生徒の属性ごとの特徴を次のようまとめることができた。

性差に関しては、女子は男子よりも、オーバーコミットメントと自律的動機が高かった。特に、都県大会水準の部活動にその傾向がみられた。学年による比較では、1年生のほうが2、3年生よりも自律的動機が高かった。部内における生徒個人の競技水準に関しては、レギュラーと準レギュラーの生徒のほうが、非レギュラーの生徒よりも他律的動機が高かった。部全体としての競技水準に関しては、男子において、全国大会水準の部活動の生徒のほうが、地区大会および都県大会水準の部活動の生徒よりも、オーバーコミットメントと自律的動機が高かった。最後に、競技種目に関しては、集団種目の生徒のほうが個人種目の生徒よりもオーバーコミットメントが高かった。

最後に、本調査において、自律的な参加動機と他律的な参加動機について生徒に尋ねているが、質問紙によって得られる回答は意識レベルであり、本人が自覚していない欲求や動機を捉えることには限界があった。そのため、生徒個人に対してより深く、かつ質的に捉えていくためには、

オーバーコミットメントの生徒に対する個性記述的なアプローチによって検討していくことが、今後求められるであろう。

注

- 注 1) Siegrist (1996) は、努力—報酬不均衡モデルにおいて、仕事上の努力の程度に対して、その仕事から得られる報酬（経済的・心理的・職歴的報酬）が不足の場合に、より大きなストレス反応が発生すると述べている。
- 注 2) 生徒に対して指導者の受容的な関わりと統制的な関わりについて尋ね、それぞれの平均値を基準に高得点群と低得点群に分け、次の 4 パターンに生徒と指導者の関係を分類している。すなわち、受容が高く統制の低い受容型、受容が低く統制の高い統制型、受容も統制も高い両高型、受容も統制も低い両低型である。
- 注 3) 20 種目の内訳は、サッカー (359 名)、陸上競技 (102 名)、野球 (93 名)、バレーボール (71 名)、バスケットボール (57 名)、ラグビー (51 名)、ソフトボール (41 名)、卓球 (40 名)、柔道 (25 名)、剣道 (22 名)、バドミントン (21 名)、テニス (19 名)、弓道 (18 名)、空手道・少林寺拳法 (16 名)、フィールドホッケー (11 名)、ライフル (9 名)、相撲 (7 名)、水泳 (7 名)、体操競技 (5 名)、自転車競技 (4 名) である。
- 注 4) 外的調整は、外的報酬を得ること、罰を避けることを理由としており、外的な圧力により強制的に運動をさせられている動機づけである。
- 注 5) 取り入的調整は、恥をかくことを避ける、社会的承認を得ることを理由としており、自尊心を維持するために自己の内的な圧力により運動をしている動機づけである。
- 注 6) 同一化的調整は、自律性の程度が高い動機づけとされており、目的獲得のための手段でありながらも、運動をすることに高い価値を感じている動機づけである。
- 注 7) サッカー、野球、バレーボール、バスケットボール、ラグビー、ソフトボール、フィールドホッケーを集団種目とし、陸上競技、卓球、柔道、剣道、バドミントン、テニス、弓道、空手道・少林寺拳法、ライフル、相撲、水泳、体操競技、自転車競技を個人種目として分析を行った。

文献

- Deci, E.L. (1975) *Intrinsic motivation*. New York: Plenum Press. 安藤延男・石田梅男（訳）(1980) 内発的動機づけ：実験社会心理学的アプローチ 誠信書房
- Deci, E.L. (1980) *The psychology of self-determination*. Lexington, MA: Heath. 石田梅男（訳）(1985) 自己決定の心理学：内発的動機づけの鍵概念をめぐって 誠信書房
- Deci, E. L. and Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Joksimovic, L., Siegrist, J., Meyer-Hammer, M., Peter, R., Franke, B., Klimek, W. J., Heintzen, M. P., and

- Strauer, B. E. (1999) Overcommitment predicts restenosis after coronary angioplasty in cardiac patients. *International Journal of Behavioral Medicine*, 6(4), 356-369.
- 久保正秋 (1998) コーチング論序説 誠信社
- 松井幸太 (2015) 高校運動部活動における生徒の動機づけとオーバーコミットメント—生徒の認知する指導者像からの検討— *応用教育心理学研究*, 31, 39-50.
- 文部省 (1997) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議
- 永島正紀 (2002) スポーツ少年のメンタルサポート—精神科医のカウンセリングノートから— 講談社
- 中込四郎・岸 順治 (1991) 運動選手のバーンアウト症候群に関する概念構成の試み *体育学研究*, 35, 313-323.
- Pelletier, L. G., Tuson, K. M., Fortier, M. S., Vallerand, R. J., Briere, N. M., and Blais, M. R. (1995) Toward a new measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and amotivation in sports: The sport motivation scale (SMS). *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 17, 35-53.
- Schmidt, G. W. and Stein, G. L. (1991) Sport commitment, a model integrating enjoyment dropout and burnout. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 13(3), 254-265.
- Siegrist, J. (1996) Adverse health effects of high-effort/low-reward conditions. *Journal of Occupational Health Psychology*, 1(1), 27-41.
- 高田知恵子・田村 宏・石淵真理子・藤永 隆・下山定利・柚木 仁・黒梅恭芳・丹野義彦 (1987) 部活動体験による青年期不適応について *群馬大学医療技術短期大学部紀要*, 8, 37-45.
- 遠山尚孝 (1977) 心身症者の性格・行動様式および情緒の特質について *精神医学*, 19, 27-38.
- Weiss, M. R. (1995) Children in sport: An educational model. In Murphy, S. M. (ed.) *Sport Psychology Interventions*. Human Kinetics, pp. 39-69.